

武蔵野大学学術機関リポジトリ Musashino University Academic Institutional Repository

写らないものが写るものを支えている : 映画『たまらん坂』製作日誌（小特集 その後の「ウエスト・トウキョウ・ストーリー」）

著者	小谷 忠典
雑誌名	武蔵野大学武蔵野文学館紀要
号	6
ページ	161-165
発行年	2016-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1419/00000594/

写らないものが、写るものを支えている

(映画『たまらん坂』製作日誌)

小谷 忠典

昨年の6月。武蔵野文学館から講演会「玉川上水と文学」を映像記録するように頼まれたので、撮影機材を持って西東京市民会館に向かった。研究者、大学教授の講演が終わり、最後の登壇者が舞台袖から姿を現した。80歳を過ぎた細身の紳士が柔らかな足取りで演台に到着すると、館内から拍手が湧いた。紳士はそれに穏やかな笑顔で応えた。カメラによってその身体像を捉えていた私は「嗚呼、これが黒井千次か……」と心の中で呟いた。

事前に著者の『武蔵野短篇集 たまらん坂』(講談社文芸文庫)を読んでいた。「たまらん坂」や「のびどめ用水」など、武蔵野に実在する地名が題名となった7つの連作短編集だ。どの短編にも共通して言えるのは、主人公が近いうちに定年を迎える男達で、彼らは地名とめ

ぐり逢うことによって青春の記憶を呼び覚ましていく。今回黒井氏は、講演内容と関連付け、「のびどめ用水」の執筆経緯や、姿を変えながらも流れ続ける玉川上水についての、様々な記憶を丹念に語った。黒井氏の演題は「玉川上水の感覚的記憶」。講演後に啓発されたのは、小説には直接表現されない黒井氏自身の記憶が、作品の行間に漂っているということだった。

黒井千次は1932年生まれ。東京大学経済学部を卒業後、富士重工業に入社。15年のサラリーマン生活を経て小説家となる。それ故に『武蔵野短篇集 たまらん坂』に描かれる勤め人である男達の内側から滲み出る悲喜交々の人生観が、感傷的な生として小説に反映されている。

つまり、実在する場所にじつくりと身を置き、凝視した時間の中から心身共に刻み込まれる「感覚的記憶」が、着想や手法とはまた別の側面で作品を支えているのである。

ロビーで機材を片付けていると、懇親会に向かう黒井氏と鉢合わせた。私はすかさず鞆に忍ばせていた『武蔵野短篇集 たまらん坂』を取り出し、サインをねだった。ミーハーな気持ち半分、作家の肉筆を見たかった。「良いですよ」と、黒井氏はこちらの要望にさりと応じてくれた。ボールペンで見返し遊びに記された文字は、黒井氏の笑み同様、謙虚で愛らしかった。

数ヶ月後、文学部の実習授業を受け持つことになった。共同担当者の土屋忍先生から持ちかけられた幾つかの企画の中に、本学の客員教授を務められた黒井氏に関するプロジェクトを見つける。私は迷わず「たまらん坂」の映像化を選択した。

7つの短編から「たまらん坂」を選んだ理由は、黒井氏が駐車場で目にした平仮名の「たまらん坂」という言

葉に引き寄せられたのが連作の始まりだったからだ。

内容は、「たまらん坂」を全文朗読した音声に、実在する場所の映像を重ね合わせるというものだった。

一般的に、映像は行動を描き、小説は心理を描くことを特徴とする。映像が具体的な行動から内面を想像させるのに対し（映像の設計図であるシナリオには心理描写が一切排除されている）、小説は抽象的な心理を読者の内面に立ち上げることによって、人物の具体的な姿や行為までを想像させる。映像の行動性と小説の心理性を併せ持った文学としての映像作品を作るという試みだ。

過去、末期ガンを患っていた絵本作家の佐野洋子氏から、顔を撮らないことを条件に『ドキュメンタリー映画100万回生きたねこ』の製作を許されたことがある。佐野氏は製作中に亡くなってしまったが、遺されたインタビュー音源を元に、彼女の所縁の地（佐野氏は、国内外を合わせて40回以上引越しを繰り返した）の映像で映画を構築した。

その経験を活かし「たまらん坂」というキャンパス

に、映像という絵具を思う存分塗らせてもらおうと決心した。

授業初日、教室に入ると参加者のほとんどが女学生だった。小説には、疲れた中年男の労働観や、男子学生特有の猥褻と純情が混在した、青春模様が描かれている。しかし、集まった10数人は、20歳前後の初々しい女性達なのだ。彼女らにその部分を聞いてみると、やはり、それほどのイメージを持ってないでいた。私は一瞬頭を抱えたが、思い切つてその授業形態を作品に取り入れることにした。

映像作品の冒頭、あるきっかけから、女学生が小説「たまらん坂」と出逢う。そして、読み始める。一つの物語を読むという別の視点から眺めることによって、現代の息吹を注ぎ込みながら作品を再解釈していくという構造だ。そうなる当然、朗読者は女学生でなければならぬ。彼女らの中から主人公を選出しようと考えた。

三回目の授業の日、開始時間よりも早く教室に入ると、ベランダから追い立てられるように暮れていく夕陽

を眺めている学生が一人いた。参加者の中で唯一の一年生（他は皆二年生で友人同士の参加）、渡邊だ。なぜ一年生で、しかも一人で参加したのかが気になっていたの、そのことを何気なく尋ねてみた。

渡邊は、「黒井先生に会えると思ったからです」と迷わず応えた。どこかの場面で黒井氏を対象化したいという私の願いと、学生らしい渡邊の願いが一致したからだろう、不意に渡邊と黒井氏が親密に話し合っている映像が脳裏に過ぎった。渡邊が演じる女学生の想像する「たまらん坂」の世界で、女学生と著者である黒井千次とが巡り合い言葉を交わす場面だ。

渡邊から出演の承諾を得て撮影が始まった。平和記念公園のコスモス畑。歌舞伎町のバー。三鷹駅のホーム。国立駅からたまらん坂に向かう道中など、順調とまでは行かないものの撮影は無事に進行した。

「たまらん坂」の特徴の一つとして、登場人物が小説の中心に置かれているのではなく、空間とその空間が保持する時間が物語を動かしていると考えていた私は、極

力人物は写さずに場所の実存性やそこに漂う気配、機微などの揺らぎに注目していた。

しかしどこか、「たまらん坂」との精神的な距離が縮まらないことへのもどかしさを感じていた。コンセプトははっきりしているが、作品に対する真実味が自分の中で欠けているのだ。

そうこうしている間に、黒井氏を迎えての撮影日が訪れた。前日の夜に雪が吹雪いていたので、心配になった私は、早朝からたまらん坂に向かった。到着すると案の定、歩道一面に雪が積もっていた。これから撮影するのは、たまらん坂を黒井氏が登っている途中、女学生と再会するというラストシーンだった。

5月という季節設定もあるが、これでは黒井氏が安全に歩くことができない。坂の周辺を慌てふためいていると、マンシヨンの前で今しがた雪掻きを終えたであろう、管理人の男性が花壇に腰をかけていた。その脇にはシャベルが立て掛けられている。事情を話すと、管理人は快くシャベルを貸してくれた。

急いでたまらん坂に戻り雪掻きを始める。撮影まで2

時間。なだらかな傾斜のたまらん坂は、全長約100メートル。骨の折れる作業だ。あまりに私が必死だったのか「ご苦労さまです」「ありがとう」と労いの言葉を掛けてくれる通行人がいた。知つての通り、私は自分の製作のために作業をしている。にもかかわらず、「いえいえ、どういたしまして」と返事をする自分の調子の良さに自笑した。

歩道はアイスパーンになっていて思うように作業は捗らない。ガリガリガリというシャベルとアスファルトが擦れる音が、次第にトントントンという音に変わり始めた。トントントン。幼い私は市営住宅の台所に立っていた。そして、泣いていた。目の高さにある果実が上手く切れないからではなく、父が追い剥ぎに合ったことが原因だった。

数日間、消息不明になっていた父が同僚に両脇を抱えられ家に帰って来た。仕事帰りに追い剥ぎに襲われ、父はひっそりとした路地裏で意識を失っていたそうだ。命を取り留めたのは、軒だった。大きな軒を聞きつけた近

隣の住民が警察に通報した。床の間で屍体のような父が横たわっている。無残な暴力により青紫に変色した顔や体はぴくりとも動かない。

突っ立ったままの私に屍体がゆっくりと口を開いた。「腹が減った」と微かに呟いたのだ。その時母は仕事に出掛けていた。私は無心で台所に駆け寄り、籠にあった果実を切った。その途中、涙が溢れた。安心して泣いたのは始めての経験だった。

しかし、生きるという行為は美しさだけではない。半年ほど入院した父は断片的な記憶を失う。暫くの間は数字や息子である私のことも忘れていた。記憶を失ったことで、思のように仕事が出来なくなり職を転々とした。酒に溺れアルコール依存症にもなった。「あの時、死んでればよかった……」という父の空虚な言葉を、思春期の私は幾度も耳にした。

それでも父は何とか定年まで勤め上げた。80年代前半、考えてみれば父の不運と「たまらん坂」が発表されたのは同時期である。

交通事故でもあったのか、その日のたまらん坂は大渋滞だった。その為、黒井氏の到着が遅れた。お陰で雪はきれいさっぱり片付けられた。撮影が終わる頃には、冬の柔らかな日差しによって雪は溶け始めていた。

細く輝く水流をぼんやり見つめていると、黒井氏の「感覚的記憶」という言葉を想起した。父の「堪らん」が平仮名の「たまらん」に姿を変えながら、たまらん坂に染み込んでいくようだった。これから撮影は後半に入る。

(2016年2月15日)

小谷忠典(こたに・ただすけ) 映像作家

絵画を専攻していた芸術大学を卒業後、ビジュアルアーティスト専門学校大阪に入学し、映画製作を学ぶ。初の劇場公開作品『LINE』(2008年)以来、フィクションやドキュメンタリーの境界にとらわれない意欲的な作品を製作している。『ドキュメンタリー映画 100万回生きたねこ』(2012年)では、国内外の多数の映画祭に招待された。現在、『フリーダー・カローの遺品 石内都、織るように』を世界各地で公開中である。